

# 高峰登山報告書

[ アジア地区=標高5000m以上、その他の地区=6000m以上 ]

国名	パキスタン	山名	K2	標高	8,611m	地域名	カラコルム
隊名	東海大学K2登山隊2006			派遣母体	東海大学山岳部(東海大学ヒマラヤ遠征委員会)		

今回の登山隊の区分について下記の中から該当するものを○で囲んでください。

<input type="radio"/> 組織内公募登山	<input type="radio"/> 一般公募登山	<input type="radio"/> 国内商業登山	<input type="radio"/> 外国商業登山
連絡先	氏名 出利葉義次(山岳部監督)      □-マ字 Deriha Yoshitsugu      TEL 0463-58-1211 FAX 0463-50-2061      e-mail deriha@tsc.u-tokai.ac.jp 住所 〒259-1292 神奈川県平塚市北金目1117 東海大学湘南校舎		

<b>登山内容</b>	
登山期間	2006年6月5日～8月25日
ルート名	南南東リブ
*キャンプ配置と設営日(隊員が初めて宿泊した日を設営日としてください。) 設営場所(※日の後に**氷河右岸とか○△尾根上など、平易に記して下さい。J)	各隊によって名称が異なりますので低い順から訂正してください。)
	BC ( 5,150 ) m      6月 20日
	CO ( 5,700 ) m      6月 26日
	C1 ( 6,400 ) m      7月 3日
	C2 ( 7,100 ) m      7月 20日
	C3 ( 7,900 ) m      7月 31日

*登山の成否: <input checked="" type="radio"/> 成功 <input type="radio"/> 断念      最高到達点      m地点      8月 1日 16時 50分頃到達	
*酸素	持参しない <input type="radio"/> 持参した      医療用のみ <input type="radio"/> 睡眠用 <input type="radio"/> 行動用 使用実績      睡眠時のみ C3で使用      行動中 8000m以上      から使用      医療用使用
*固定ロープ	持参しない ( 3,500 m持参した。 )      使用実績 [ 3,500m ]

*原因 [ 表層雪崩 懸垂雪崩 その他 ]      高山病      転滑落 <input type="radio"/> その他急病 行方不明 [      ]	
*事故発生日	7月 29日 6時 30分頃 ※事故発生場所 [ 南南東リブ5,500m付近 ]
*事故発生高度	*事故発生日と死亡日が異なる場合には記入してください。
*当該氏名	蔵元 学土

\*事故の概要

頂上アタックでC1に向かう途中、激しい腹痛を訴え下山する旨連絡があった。自力で取り付きまで下山した後、迎いの医師・隊員が付き添いBCに下山した。診察の結果、急性虫垂炎の疑いがあると診断され、ブロードピークBCに担架で搬送、ヘリでスカルドの病院に収容された。

隊の構成（都市滞在だけの方は除いてください。氏名のふりがなはローマ字でお願いします。）

氏名	フリガナ	性別	生年月日	歳	登頂日	電話番号
1 隊長 出利葉義次	Deriha Yoshitsugu	男	19 58 年 3 月 29 日	48	月 日	
2 副隊長・医師 笹尾 玄	Sasao Gen	男	19 72 年 6 月 16 日	34	月 日	
3 隊員 片岡 洋介	Kataoka Yousuke	男	19 62 年 8 月 25 日	43	月 日	
4 隊員 蔵元 学士	Kuramoto Shoudo	男	19 78 年 9 月 30 日	27	月 日	
5 隊員 小松 由佳	Komatsu Yuka	女	19 82 年 9 月 22 日	23	8 月 1 日	
6 隊員 青木 達哉	Aoki Tatsuya	男	19 84 年 9 月 24 日	21	8 月 1 日	
7 医師 小林 利毅	Kobayashi Toshiki	男	19 66 年 2 月 24 日	40	月 日	
8 看護師 小林 幸子	Kobayashi yukiko	女	19 66 年 9 月 23 日	39	月 日	
9 支援隊員 平出 和也	Hiraide Kazuya	男	19 79 年 5 月 25 日	27	月 日	
10 支援隊員 野村 智志	Nomura Satoshi	男	19 84 年 11 月 14 日	22	月 日	
11 支援隊員 岡野 巧	Okano Takumi	男	19 83 年 7 月 14 日	21	月 日	
12						
13						
14						
15						
16						
17						
18						

高所ポーター（登攀活動に従事した者のみ記入してください。）ガイド=G、サーター=S

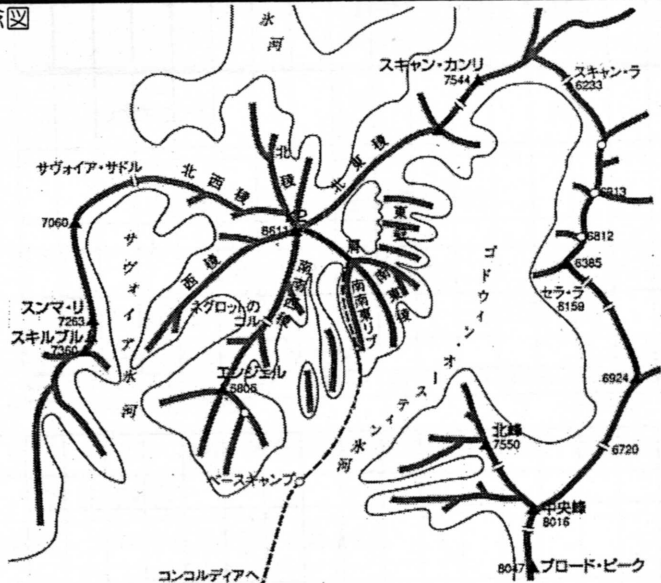
氏名	年齢	登頂日	年齢	登頂日
1 ファル・ファド		月 日	5	月 日
2 ファズ・アリ		月 日	6	月 日
3		月 日	7	月 日
4		月 日	8	月 日

連絡官	ハビブ・ジャミ	( 歳)	通訳	アリムサ	( 歳)
BC要員	コック	アブドゥ	キッチン	サビール、フィダーリ	メール
報告書	「K2 2006」2007年4月発行		判形	判	頁
その他発表した記録	山と溪谷10月号、岳人11月号				

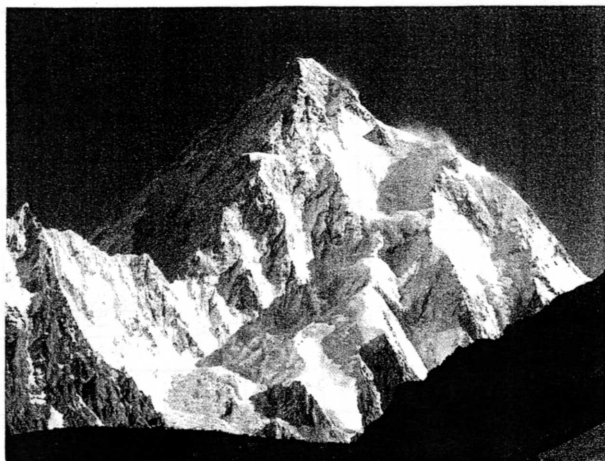
登山概況

6月5日、先発隊3名がイスラマバードに出発、9日の本隊到着を待ち、10日夜バスで23時間かけスカルドに向かった。スカルドでキャラバン出発準備を整え、13日その出発地であるアスコールにジープで到着した。翌14日、二百数十名のポーターを雇いキャラバンを開始、長大なバルトロ氷河を7日間歩き続け、20日ゴトウィンオースティン氷河のBC予定地に到着した。BCの標高は5,150m、K2を正面に仰ぎ見る氷河上のモレーンに設営された。21日南南東リブ取付の偵察を行い、22日から本格的なルート作と荷上げを開始。急峻な氷雪壁、岩稜からなる南南東リブは、雪崩や落石の危険度が極めて高く、それを避けながらルートを延ばした。7月3日岩稜上のテラスにC1(6,400m)を設営、20日、急峻な雪稜を削ってC1(7,100m)を設営した。さらに、想像を絶する巨大な落石の恐怖に耐えながら、希薄な酸素下での苦しい登攀を続けた。24日午後7時30分、南東稜ショルダー、アタックキャンプとなるC3(7,900m)予定地に到達、夜間苦闘の末、午後10時過ぎ第2キャンプに帰幕した。29日アタック隊の蔵元、小松、青木の隊員3名がBCを出発、3時間後蔵元隊員が急性虫垂炎でアタックを断念、ヘリコプターでスカルドの病院へ搬送された。小松、青木の2名でアタックを続行、29日C1、30日C2と登り続け、31日C3(アタックキャンプ)入りした。8月1日午前2時30分、2名のアタック隊は1人2本の酸素ボンベを背負い、毎分2リットルの酸素を吸入しながら、頂上に向けアタックを開始した。途中、セラック崩壊で雪崩の危険があるボトルネック、さらに氷河まで落差3,500mの氷のトラバースを突破、急峻な氷雪壁を登攀して頂稜に達し、苦闘14時間20分、K2の登頂に成功した。小松由佳は日本人女性初登頂を果たし、青木達哉は世界最年少登頂者となった。急峻で困難な南南東リブから女性が登頂したのは世界初となる。しかも、女性自らトップに立ってルートを拓き、アタック隊のリーダーとして登頂した女性は、K2登山史上初である。登山隊は13日にベースキャンプを撤収、帰路キャラバンはゴンドコロ峠(5,670m)を越え、16日フーシェに下山した。スカルドにて返送隊荷を整理した後、崖崩れで道路が寸断され、その復旧を待ちながら18日に移動を開始。途中、足止めされながらも22日イスラマバードに到着。24日夜、イスラマバードを出発、25日全員無事に帰国した。

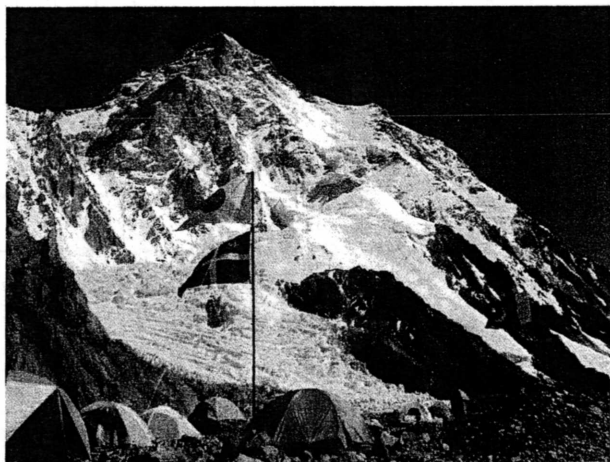
概念図



山の全景写真



南南東リブ



天候の状況

BC設営以降、から7月10日頃まで快晴の日が続いた。7月中旬に強風と積雪に見舞われたが、その期間は3~4日程度であった。回復後、イタリア隊が登頂を果たした。その後、4~5日周期に天候が変化し、7月下旬から8月上旬の回復期に照準を合わせ、東海大隊は登頂した。その後、降雪直後にアタックを敢行したロシア隊はボトルネックを落下する雪崩に襲われ、4名が行方不明となった。

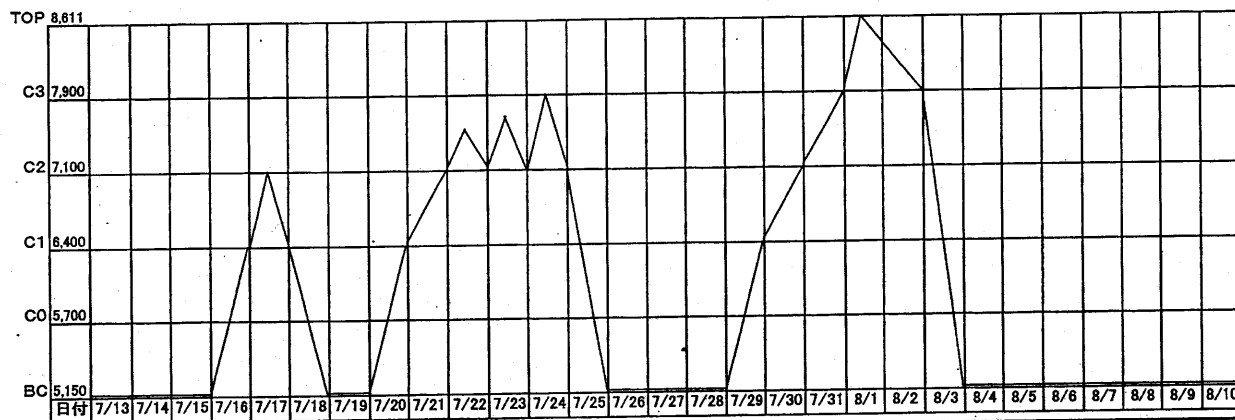
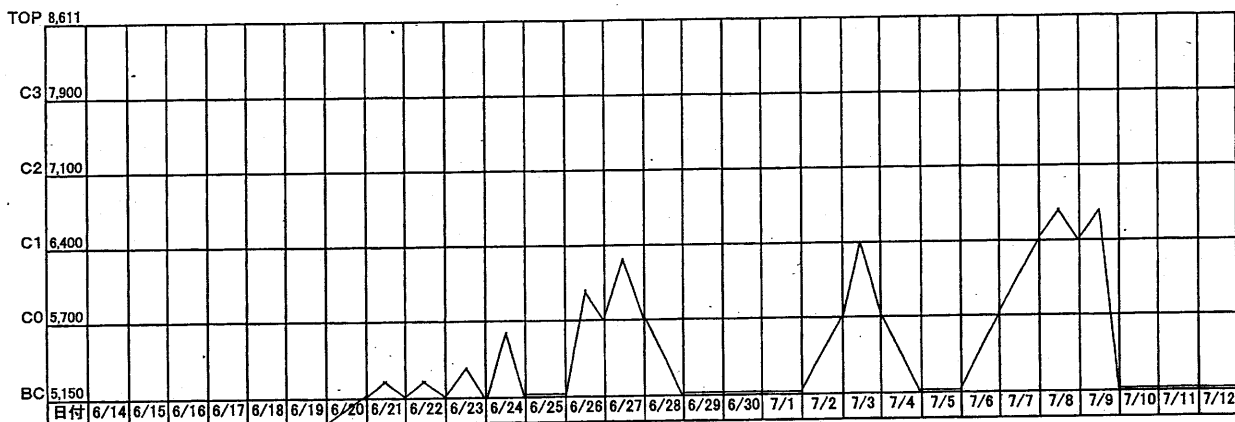
雪崩情報 (被害が無いものについても発生状況を記入してください。)

ゴドウィン・オースティン氷河ルート上、南東稜と南南東リブ間のセラック崩壊による大規模な雪崩を3回ほど確認した。小規模のセラック崩壊雪崩は頻繁に発生したが、行動中の隊員に影響なかった。南南東リブ取り付き付近は、融雪雪崩が頻繁に発生した。

テイクイン、テイクアウトを報告してください。

空缶、空瓶等はすべて持ち帰り、可燃物は焼却炉で定期的に焼却した。また、トイレントを設営し、使用済ペーパーもすべて焼却処分にした。焼却炉を使わず焼却した跡がいくつかあり、見るに耐えない汚い所が随所にあった。下部のフィックスロープはすべて回収したが、下降に危険が伴うフィックスロープは回収をあきらめた。他隊が残したテント、フィックスロープ類で使用可能なものは、ハイポーターがかなりの量を担ぎ下ろした。回収という意味合いではなく、彼らの戦利品としての色が濃い。

小松由佳



**入山時の特記事項（ローカルポーター、使役動物の雇用状況、道路状況など）**

アスコレから往路230人のポーターを雇用、途中解雇のポーターにはチップは出さなかったが、BCまで荷を上げた175人に、1人50ルピーのチップを出した。基本的に賃金アップされているため、トラブルもなく気持ちの色合いが濃いチップであった。帰路はゴンドコロ峠を越えフーシェに下山したが、担ぐ重量制限で極端にポーターが減ることはなく、支援隊と合わせ100人を超えた。こちらも同額の50ルピーのチップを出した。チップはわずかであったが、基本的に高騰した人件費に悩まされた。

**同じ山、山域に入山していた他隊の情報についてお知らせ下さい。（登山隊名、人数、隊長名、連絡先、ルート名**

登山結果など分かる範囲で結構です。

K2には、パキスタン隊、イタリア隊、アメリカ隊(国際隊)、カナダ隊、ロシア隊などがBCを設営していた。すべて南東稜から登頂を目指しての入山であった。パキスタン隊がルート作を完了するのを待っていたが遅々として進まず、結局あきらめパキスタン隊は下山した。それに続いていたカナダ隊は、時間切れで早々に下山した。南南東リブから登頂を目指したのは東海大隊だけで、こつこつとルートを延ばし、今シーズン最初にショルダに到達した。そんな中、イタリア隊の2名が速攻で無酸素登頂を果たした。他隊もそれに続けとばかりにショルダを目指したが、降雪によるラッセルが激しく到達できぬまま、ロシア隊を除くすべての隊が撤収下山した。ロシア隊はアメリカ隊の残存数名と共に粘ったが、降雪直後アタックに出発したため、ボトルネック上部から発生した雪崩で4名が行方不明となった。

**その他の情報（登山だけではなく、地域情報などありましたらおしらせください。）**

今シーズンのパキスタン北部は大雨による土砂崩れで、インダス川沿いのカラコルムハイウェイはいたるところで寸断された。入山が遅かった登山隊は、スカルドまで2週間以上を要した。パルトロ氷河にあまり影響はなく、むしろ麓や河川流域の方が大変だったようである。我々が影響を受けたのは帰路で、土砂崩れの通行止めで過酷な陸路を強いられた。

**現地エージェント**

名称 日パトラベル

住所 House 22,Bazar Rord,G6/4,(p.P.O.Box2253) ISLAMABAD

TEL 92-51-2821254

FAX 92-51-2820992

e-mail [nippagrp@isb.comsats.net.pk](mailto:nippagrp@isb.comsats.net.pk)

評判